

3章 コロナ禍における バレエ団運営スタッフ・ダンサーの育成

3章 コロナ禍における バレエ団運営スタッフ・ダンサーの育成

令和2年度は、新型コロナウイルスの影響により、バレエ団は新たな運営方法を模索する必要に迫られた。そこでこの状況下におけるバレエ団運営スタッフの育成のために、7～3月にかけて「海外バレエ団の新型コロナウイルス対応状況に関するレポート発行」を実施した。

年度後半の2～3月には、コロナ禍での知見を運営スタッフやダンサーが今後活かすことができるよう、「バレエ団運営スタッフ向け ファンドレイジングセミナー」および「ダンサーのコンディショニングセミナー ～コロナ禍の怪我の事例を踏まえて～」を実施した。

3-1 海外バレエ団の新型コロナウイルス対応状況に関するレポート発行（バレエ団運営スタッフの育成）

本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中のバレエ団が感染防止対策や公演開催方法の工夫が求められることとなった。

日本のバレエ団は、世界のバレエ団の対応状況を参考に、視野を広げてこのコロナ禍を乗り越えるための方策を検討する必要があるが、少ないスタッフで運営を行っている日本のバレエ団では、それぞれが世界情勢と各国のバレエ団の状況にアンテナを張って必要な情報をタイムリーに入手する余裕はない。また世界のバレエ団の新型コロナウイルスへの対応状況を知るには、英語やその他言語のウェブサイト等を読む必要があるが、そうしたことが可能なスタッフの数も限られている。

そこで、各バレエ団が海外の最新事例を参考に、十分なリスク想定を行いながら、このコロナ禍におけるさまざまな課題に取り組み、次世代の観客拡大に向けた事業戦略を検討できるよう、新型コロナウイルスによる影響を受けた海外のバレエ団の対応状況を昭和音楽大学バレエ研究所の協力により情報収集し、バレエ団運営スタッフ育成の一環として、日本バレエ団連盟の会員団体に状況共有することとした。

<実施概要>

運営スタッフ向け「海外バレエ団の新型コロナウイルス対応状況に関するレポート発行」

- レポート発行対象：日本バレエ団連盟の会員団体（9団体）の運営スタッフ
- レポート発行時期：2020年7月～2021年3月（週に1回レポートを発行）
- 協力：昭和音楽大学バレエ研究所

<実施方法>

- インターネットを中心として情報収集を行った。
- 各国メディア等のウェブサイトを確認し、その中からバレエ団運営に関わる部分を拾い出し、記事の一部を日本語に翻訳した。
- バレエ団運営の現場で役に立つ情報を優先的に選択した。新型コロナウイルス蔓延による財政難やスタッフの解雇等、バレエ団の経営面に関するニュースがあれば優先的に選択した。バレエ団の活動再開や公演再開、また公演中止のニュースがあれば、それも優先的に選択した。バレエ団における新型コロナウイルス感染のニュースも優先的に選択した。また公演が開催されたならば具体的にどのような方法を取ったのか、公演中止ならばどういった経緯で中止となったのか等、現場で活用できる具体的な情報を重視した。コロナ禍の中でファンドレイジングをどのように行ったのか等の情報にも注視した。
- バレエに関する情報を優先的に選択した。しかしバレエだけでなく、オペラやミュージカル等、実演芸術に関する情報も、関連性がありそうなものについては対象とした。
- バレエ団運営と新型コロナウイルスをめぐる状況は刻々と変化する。速報性を重視するため、全国紙やテレビだけでなく個人によるネットメディア等も参考とした。
- 情報収集対象の中心が英語メディアのため英語圏が中心ではあるが、できるだけ全世界のバレエ団運営に関するニュースを盛り込んだ。また全国紙や全国メディアだけでなく地方紙等についても確認を行った。

<情報収集を行ったウェブサイト>

新聞、テレビ、業界誌、ネットメディア等

ABC News

The Armenian Mirror-Spectator

AZ Big Media

BBC

The Berkley Beacon

Birmingham Live

Boston Globe

Broadway World Switzerland

B&T

CBC

CBC SF Bay Area

CGTN

Classic FM

Classic Music News Ru

Click 2 Houston

CNBC

Dance Magazine
Egypt Independent
Ejinsight
Euronews
Financial Times
The FNews
Gramilano
Guardian
Houston Chronicle
Limelight Magazine
Mail Online
Music Seasons
MUSICQ3
New York Times
Newshub.
The North West Star
Open Wire
The Philadelphia Inquirer
Presa Latina
Pointe Magazine
Reuters
River Bender
Sacramento Business Journal
San Francisco Chronicle
SkyNews
Slipped Disc
The Stage
Time Our Miami
Town and Country
The West Australian
Vox
Washington Post
We Rave You
What's On Stage
WWD
Yonhap News

以上に加えて著名なバレエ団の公式サイトやSNSについても確認を行った。

<発行レポート概要>

発行日	トピックス
2020年 7月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ・スカラ座が133日の閉鎖を経て公演を再開（イタリア・ミラノ） ・パリ・オペラ座バレエ団が秋にガルニエで公演を行うことを発表（フランス・パリ） ・クイーンズランド・バレエがワークショップを再開（オーストラリア・クイーンズランド） ・メリーランド・バレエ・シアターが屋外にスタジオスペースを設置（米国・メリーランド） ・実演芸術が元に戻るまでの5段階のロードマップが英国政府により発表される（英国） ・アメリカ中のバレエ団で『くるみ割り人形』公演のキャンセル相次ぐ（米国） ・ペンシルヴァニア・バレエは本年度の『くるみ割り人形』公演の中止を発表（米国・ペンシルヴァニア） ・イングリッシュ・ナショナル・バレエは政府の支援がない限り、クリスマス公演を行えないと発言（英国） ・ブルガリアのオペラハウスがソーシャルディスタンスなしで再開（ブルガリア） ・活動を再開したダンスカンパニーもあるが、そのリスクは？（米国）
7月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・ワシントン・バレエがオンラインで、安全と思われるファンドレイジングのガラ公演を行った。しかしアーティストを危険に晒すこととなった。（米国・ワシントンDC） ・マリインスキー劇場がオペラとバレエの公演を再開（ロシア、イタリア） ・英国政府が安全な公演開催のためのガイドラインを発表（英国） ・英国政府が芸術界に15.7億ポンドの追加援助を決定（英国）
7月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・劇場、音楽堂でのソーシャルディスタンスを保った屋外公演が、8月初旬から再開（英国） ・ロイヤル・オペラ・ハウス事務局長のアラン・ベアードが「大幅な給料減額」を受けた（英国・ロンドン） ・経済的な逼迫により、ロイヤル・オペラ・ハウスが随時的な契約の職員を解雇（英国・ロンドン） ・取り戻す～ヨーロッパのダンス界が国からの大規模な援助を得て始動（欧州）
7月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・サクラメント・バレエ団が2020年-2021年シーズンを中止し、芸術監督は退任（米国・サクラメント） ・マイアミ・シティ・バレエがリンカーン・ロードの空き店舗を劇場空間に変える（米国・マイアミ） ・ダンサーにソーシャルディスタンスなどない。どうやって活動を続けるのか？（米国・ニューヨーク） ・危機に瀕した芸術界への政府支援が遅すぎると下院議員からの指摘（英国） ・ヒューストン・バレエが『くるみ割り人形』公演を中止し、スタッフを解雇（米国・ヒューストン）
8月4日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエ・アリゾナが秋シーズンのプログラムを発表（米国・アリゾナ） ・ワシントン・バレエ事務局長が退任し、『くるみ割り人形』と20年の残りの公演を中止（米国・ワシントンDC） ・屋内での公演再開は延期され、マスク着用が義務となる（英国・イングランド） ・『デュエットとソロ』が野外公演で～イタリアでダンス公演が再開（イタリア・ネルヴィ）
8月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス蔓延後初めて、ロイヤル・ニュージージーランド・バレエが国内ツアーを開催（ニュージージーランド） ・ボリショイとマリインスキー劇場のダンサー自宅隔離（ロシア） ・バレエ興行主ダニリアン夫妻が新型コロナウイルスにより困難に直面（米国）

発行日	トピックス
2020年 8月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・マリインスキー・バレエ団内で新型コロナウイルスのクラスターが発生（ロシア・サンクトペテルブルク） ・サドラーズ・ウェルズ劇場の従業員26%が人員整理の対象となる恐れ（英国・ロンドン） ・カナダ国立バレエ団が1955年以来初めて『くるみ割り人形』公演を中止（カナダ・トロント） ・サム・フェンダーがゴスフォース公園で、英国初のソーシャルディスタンスを保ったコンサートを開催（英国・ニューカッスル）
8月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアのバレエ団が公演を再開した途端、新型コロナウイルスの集団感染に直撃される（ロシア）
9月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスが蔓延する世界で、大学のダンスコースはどう運営される？（米国） ・サンフランシスコ・バレエ団は新型コロナウイルスのため、観客のいる『くるみ割り人形』公演を中止（米国・サンフランシスコ）
9月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス蔓延後初めて、英国ロイヤル・バレエ団のダンサーが観客ありの公演を開催し、希望をもたらす（英国・ロンドン） ・（英国文化相）オリヴァー・ドゥデン：「クリスマスまでに劇場が完全に再開することを願っている」（英国） ・（英国文化相）オリヴァー・ドゥデン寄稿：クリスマスまでに従来の公演が戻ってくるのを、人々は舞台袖で待ち望んでいる。「眠れる森の美女作戦（Operation Sleeping Beauty）」によってこの冬、家族連れの観客に舞台の魔法を取り戻す。（英国）
9月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェスト・オーストラリアン・バレエ団が甘く妖しい『ドラキュラ』をヒズ・マジエスティアーズ劇場で再演（オーストラリア・パース） ・ロシアのポリショイ・バレエ団が公演を再開（ロシア・モスクワ） ・中国国立バレエ団がロックダウン後、初のオリジナル作品を上演（中国・北京） ・コロナ感染拡大中に公演を続行するってどんな感じ？（韓国） ・ウェストエンドのミュージカル：ソーシャルディスタンスを保った公演に関して詳細が明かされる（英国・ロンドン） ・ロンドン・ウェストエンドの6つの劇場が公演を再開予定（英国・ロンドン）
9月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・英国ロイヤル・バレエ団が10月に100名規模のカムバック公演を開催することを発表（英国・ロンドン） ・パリ・オペラ座バレエ団のダンサーが新型コロナウイルス感染の危機に直面している（フランス・パリ） ・ヒューストン・バレエ団のダンサーらと有名シェフが、遠隔ディナーで9万ドルの寄付金を集める（米国・ヒューストン）
9月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・出演者が新型コロナウイルスに感染していることが判明して以来、ポリショイ劇場の公演再開は問題山積みである（ロシア・モスクワ） ・ランベールが新たなデジタルプラットフォームで新作を発表（英国）
10月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ・スカラ座バレエがガラ公演を開催し、フェリ、ボッレ、ザハロワ、ボッレといったダンサーが舞台へ復帰（イタリア・ミラノ） ・ボストン・バレエのダンサーらがスタジオに戻る（英国・ボストン） ・クリスマスにロイヤル・バレエ団がロイヤル・オペラ・ハウスで『くるみ割り人形』を上演予定（英国・ロンドン）

発行日	トピックス
2020年 10月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・英国ロイヤル・バレエ団のカムバック公演—ふたたび飛翔することができる自由（英国・ロンドン） ・コロナウイルスによる危機を乗り越えるため、バーミンガム・ロイヤル・バレエ団が政府からの助成を受けた（英国・バーミンガム） ・なぜウィーンのアムステルダム・オペラハウスは疫病の最中でも公演を続けることができたのか（オーストリア・ウィーン）
10月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエ団団員から新型コロナウイルスの陽性反応が検出され、チューリヒ・オペラ・ハウスが『眠れる森の美女』公演を中止（スイス・チューリヒ） ・イングリッシュ・ナショナル・バレエ団が公演を再開。『くるみ割り人形』も上演予定（英国・ロンドン） ・サドラーズ・ウェルズ劇場が11月に公演を再開（英国・ロンドン）
10月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・イタリアの劇場が明日から閉鎖（イタリア） ・ニューヨーク・シティ・バレエ団は来年9月まで公演を行わない予定（米国・ニューヨーク） ・バイエルン国立バレエ団が自宅待機を余儀なくされ、『白鳥の湖』公演は中止（ドイツ・ミュンヘン）
11月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエ団がソーシャルディスタンスを保つための衣装を導入（英国・バーミンガム） ・パリ・オペラ座アレクサンダー・ネーフ総監督がパリ・オペラ座の劇場公演に関する声明を発表（フランス・パリ） ・ボリショイ劇場で124名の新型コロナウイルス感染者が報告される（ロシア・モスクワ） ・ミラノ・スカラ座、ナポリのサンカルロ劇場で感染が急速に拡大（イタリア） ・韓国のバレエ教室で40名の感染（韓国）
11月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・ボストン・バレエ団がデジタルシーズン公演のために路上で撮影を行う（米国・ボストン） ・カナダ国立バレエ団が2020年-2021年シーズンに予定されていた公演すべての中止を発表（カナダ・トロント） ・イングリッシュ・ナショナル・バレエ団がオンデマンドの映像プラットフォームを構築（英国・ロンドン）
11月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・香港バレエが公演を再開（香港） ・ベルリン国立バレエ団はいかにして『ジゼル』公演を成功させたのか（ドイツ・ベルリン）
11月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・サンフランシスコ・バレエ団がデジタルシーズンを開催予定（米国・サンフランシスコ） ・マスク、コロナウイルス検査、ダンサーの「グループ」：いかにワシントン・バレエ団がデジタルシーズンに臨んだか（米国・ワシントン）
12月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・お菓子と現実の国：新型コロナウイルスの『くるみ割り人形』公演への影響（米国）
12月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・『くるみ割り人形』公演中止の中、ニューヨーク・シティ・バレエ団のダンサーらは新たな活動を行っている（米国・ニューヨーク） ・アメリカン・バレエ・シアターがメトロポリタン・オペラ・ハウスでの春シーズン中止を発表（米国・ニューヨーク）
12月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイヤル・オペラ・ハウスが公演を中止（英国・ロンドン） ・ロンドンが最高レベルの警戒となり、ウェストエンドの劇場は再び閉鎖（英国・ロンドン） ・パリ・オペラ座がオペラとバレエ公演を中止（フランス・パリ）

発行日	トピックス
2020年 12月22日	<ul style="list-style-type: none"> ・英国ロイヤル・バレエが『くるみ割り人形』ライブストリーミングを中止（英国・ロンドン） ・カイロ・オペラ・ハウスにて『くるみ割り人形』公演が12月23日より開幕（エジプト・カイロ） ・イングリッシュ・ナショナル・バレエ団がクリスマスに向けて『ナットクラッカー・ディライト（くるみ割り人形）』をオンライン上映（英国・ロンドン） ・ロシアのバレエ～自宅隔離、死、そしてパンデミックの最中にも公演を続行するということ（ロシア）
2021年 1月12日	<ul style="list-style-type: none"> ・公演再開、そして中止～新型コロナ蔓延中のバレエ（オーストラリア・パース、ポーランド・ワルシャワ）
1月19日	<ul style="list-style-type: none"> ・スコティッシュ・バレエ団がデジタル上の健康プログラムやウェルビーイングのための取り組みを強化（英国・グラスゴー） ・サンフランシスコ・バレエ団が初のヴァーチャル・ファンドレイジング・ガラ公演を開催（米国・サンフランシスコ）
1月26日	<ul style="list-style-type: none"> ・マルチビューストリーミングこそが舞台芸術の未来なのか？（英国） ・パンデミックの渦中、ロシアのボリショイ・バレエ団は公演を継続（ロシア・モスクワ）
2月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・パリ・オペラ座バレエ団は新型コロナでも踊り続ける（フランス・パリ） ・パリ・オペラ座が『イル・トロヴァトーレ』公演を中止し、2月公演スケジュールも変更（フランス・パリ） ・4月に開催されるヒューストン・バレエ団『くるみ割り人形』マーケットについて知っておくべきこと（米国・ヒューストン） ・EU圏内の文化産業は新型コロナウイルスによって2番目に大きく被害を受けた（欧州）
2月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・クオモ州知事は、ニューヨークで更なる新型コロナウイルス検査を行うことで、ブロードウェイの劇場や大規模な会場の再開を目指すと述べた（米国・ニューヨーク） ・ニューヨーク・シティ・バレエ団が舞台に戻る（米国・ニューヨーク）
2月16日	<ul style="list-style-type: none"> ・広告制作会社R/GA企画のキャンペーンで、テルストラとオーストラリアン・バレエ団が6つの小規模バレエ作品を制作 ・バレエのTik Tokでは若手ダンサーが本音を語る
2月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・（英国首相）ボリス・ジョンソンが5月17日からの劇場再開について発言（英国） ・サラソタ・バレエ団が観客の前で野外公演を開催（米国・サラソタ） ・カルロス・アコスタ：「一定世代の若いダンサーがまるまる失われる可能性がある」（英国）
3月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイヤル・ニュージーランド・バレエが公演を延期（ニュージーランド） ・ウィーン・フィルからメトロポリタン歌劇場管弦楽団の経営陣へ：世界が注目している（米国・ニューヨーク） ・ミラノ・スカラ座バレエ団「ヌレエフに捧ぐ」ガラ公演が新型コロナウイルスにより中止（イタリア・ミラノ） ・パリ・オペラ座の3月公演全てが中止（フランス・パリ）
3月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・アスペン・サンタフェバレエがバレエ団を解散（米国・サンタフェ） ・ヨーロッパの劇場が再開に向けて始動しているが、観客は戻るのか？（欧州）

※ 2021年3月16日、23日、30日にも発行予定

＜海外バレエ団の新型コロナウイルス対応状況に関する概観＞（2021年2月25日時点）

以下はすでに発行した「海外バレエ団の新型コロナウイルス対応状況に関するレポート」の月別、地域別概観である。まず月全体の概観について記載した。それからその月のレポートの内容を4つの地域（欧州・ロシア、英国、北米、その他の地域）に分け、さらに地域ごとの概観について記載した。

本レポートは既に起こった事について書かれたニュースや記事を元に構成されている。よってレポートに掲載された時点で、公演等が起きてから数日から数週間経っていることがある。例えば9月末に起きた事柄に関しては、10月初頭のレポートに掲載されることがある。以下は発行したレポートについてまとめたものであるため、例えば9月末に起きた事柄でも、10月発行分のレポートに掲載された内容は、10月として以下に記載した。

2020年7月

概観：7月はヨーロッパや北米、日本では夏ということもあり、1日あたりの新型コロナウイルスの新規感染者が減ったためか、劇場再開や公演再開に関連した報道が多かった。それと同時に特に北米では、年末の『くるみ割り人形』公演中止に関する報道も多かった。特に北米のバレエ団はバレエ団年間収入の大部分をクリスマス時期の『くるみ割り人形』公演に依存している場合が多く、『くるみ割り人形』公演を開催できるかどうかは、バレエ団経営に大きな影響がある。

欧州・ロシア

7月初旬には、ミラノ・スカラ座がオペラ公演で133日ぶりに再開した。バレエではなくオペラ公演であり、2,000席の劇場で600席のみを使用してではあるが、欧州における久々の劇場再開はバレエ関係者にとっても明るいニュースであった。しかしながら7月11日の続報では、チケットは売れていないようだであった。観光客が戻っていないこと、また地元民にとってはちょうどバカンスのシーズンであることが理由ではないかと述べられている。

フランス・パリでは、パリ・オペラ座バレエ団が2020年秋にガルニエで公演を開催することが発表された。古典作品は10月2日から、コンテンポラリー作品は11月5日から公演が再開される予定である。

ブルガリアでは6月末にソフィア・オペラ・ハウスがソーシャルディスタンスなしで、合唱もついたオペラ公演を再開した。

ドイツのヘッセン州立劇場では6月に舞台上、客席共にソーシャルディスタンスを保って公演が開催された。ダンサー同士は6メートルの距離を置き、観客も3席空けて着席した。またバレエアムラインではレッスンを再開し、ダンサーらは新型コロナウイルスに関する条項を盛り込んだ契約書にサインをして、仕事に復帰した。ダンサーはグループに分かれ、グループ以外のダンサーとは接触を行わない。またスタジ

オには線が引かれ、レッスン後は8つある更衣室に分かれた。シュツットガルト・バレエ団は3月以来初めてとなる公演を7月25日に開催した。ガラ公演で、劇場内の客席を1,400席から249席に減らして上演された。また公演の野外中継をドライブイン映画館で行った。こうした公演は、すべて州や市からの支援の下に行われた。

ロシアでは、マリンスキー劇場が7月よりオペラとバレエの公演を再開したことが報じられた。オペラ、バレエ公演とも客席ではソーシャルディスタンスが保たれ、ガラ形式の公演だった。

英国

英国では6月末に、いかに公演再開を行うか、そのプロセスを5段階に分けたロードマップが英国政府によって発表された。続いて英国政府は7月初頭には、いかに公演を開催するのかのガイドラインも発表した。ガイドラインにはソーシャルディスタンスを保つことや清掃を徹底することなど、公演開催に向けた様々な具体的事項が記載されている。また芸術団体に向けて、英国政府から15.7億ポンドの追加援助も決定された。8月初旬から客席でソーシャルディスタンスを保った公演が再開可能であると、英国首相は述べた。しかし実演団体側からは、客席でソーシャルディスタンスを保った公演は採算が合わないので、経営的な観点から公演再開が難しいとの強い反発があった。

こうした報道と同時期にロイヤル・オペラ・ハウスの給料削減や解雇も報道された。ロイヤル・オペラ・ハウスの事務局長が給料減額を受けたほか、音楽監督も給料を辞退しているとの報道があった。また随時的な契約のスタッフを全員解雇する予定であるとの報道もあった。

イングリッシュ・ナショナル・バレエ団はスタッフの8割以上に一時帰休を命じており、また残ったスタッフも減給を受け入れたと報道があった。また芸術監督のタマラ・ロホは年末の『くるみ割り人形』公演に関して、ソーシャルディスタンスを守り、観客の人数を大幅に減らして公演を開催しても利益は出ないため、政府からの支援がない限りは公演を開催しないだろうと述べた。

北米

7月6日付けワシントン・ポスト紙はメリーランド・バレエ・シアターが屋外で公演スペースを設置したというニュースを報じた。

また米国のバレエ団が2020年末の『くるみ割り人形』公演を開催するかどうか、この時期には多くのメディアで報じられた。米国のバレエ団は年間収入の多くをクリスマス時期の『くるみ割り人形』公演に依存しているため、2020年末に『くるみ割り人形』公演を開催することができるかは、バレエ団の経営にとって非常に大きな影響がある。例えばペンシルヴァニア・バレエ団は観客の安全を考えて、1968年のバレエ団創立から初めて、年末の『くるみ割り人形』公演を中止にすると6月末に発表

した。ペンシルヴァニア・バレエ団は秋に上演予定だった『シンデレラ』も2021年春に上演を延期しており、秋から冬にかけての公演がすべてなくなった格好となった。『くるみ割り人形』は27公演が予定されていたが、それはバレエ団員やオーケストラ団員にとってほぼ唯一の年末の収入源であり、それがなくなった形である。公演中止によって収入がなくなった結果、バレエ団は計22名のスタッフに解雇、または一時帰休を命じたとされている。またバレエ団に残ったスタッフも減給となったと報じられた。

ワシントン・バレエは6月18日にデジタルでファンドレイジングガラを開催し、ワシントン州の設けた感染予防のためのガイドラインを遵守したが、しかしその後バレエ団芸術監督であるジュリー・ケントの新型コロナウイルス感染が報告された。7月14日付けワシントン・ポスト紙は、「アーティストや関係者の安全や健康を保つには、ガイドラインを遵守する以上の取り組みが必要」と結論づけている。

サクラメント・バレエ団は2020年-2021年シーズンを中止、芸術監督は退任した。またヒューストン・バレエ団でもフルタイムで勤務するスタッフの30%を解雇し、ダンサーや音楽家にも自宅待機を命じた。年末の『くるみ割り人形』公演の中止も発表された。

その他の地域

7月6日付The North West Star紙は、オーストラリアのブリスベンを本拠地とするクイーンズランド・バレエ団が、公演ではなくワークショップではあるが、オーストラリア内のツアーを開始したと報じた。新型コロナウイルス感染防止のためのガイドラインを遵守することが条件だ。学校、コミュニティなど計14箇所でワークショップを行った。

2020年8月

概観：8月になるとイタリアで屋外のバレエ公演が開催される、ニュージーランド・バレエがツアーを行う等、世界のバレエ界では舞台再開に向けてさまざまな動きがあった。しかしながら大がかりな公演を再開したロシアのバレエ団からは集団感染のニュースも報じられた。英国では政府より8月中旬に劇場再開の許可が下りたが、同時に劇場の人員整理が伝えられるなど、コロナ禍で公演ができないことによる、経営面への影響も報じられた。

欧州・ロシア

イタリアのネルヴィでは、屋外でバレエのガラ公演が開催された。同一世帯のダンサーのみが共に踊り、ハンブルク・バレエ団のシルヴィア・アッツォーニとアレクサンドル・リアブコなどが出演した。観客は1,000名であり、それはイタリアの野外公演としては、開催時点で許可されている最大の収容人数である。観客は互いに四方1メートルの空間を空けて着席し、会場に入るためには検温を行い、またマスクを着用

も求められた。幕間の観客同士の会話を避けるために、休憩なしで開催された。レッスンや公演が再開されたロシアでは、ダンサーらが新型コロナウイルスに感染したと関係者への取材を通じて報じられた。ポリショイ・バレエ団では1名のダンサーが感染し、その結果、多数のダンサーが自宅隔離を行っているとの報道があった。8月中旬には、マリインスキー・バレエ団では20名以上のダンサーと数名のバレエ教師が感染したのではないかと複数のサイトから非公式に報じられた。その後、8月19日にはニューヨーク・タイムズ紙がマリインスキー・バレエ団の集団感染を大きく取り上げた。ニューヨーク・タイムズ紙によればマリインスキー・バレエ団は7月よりガラ公演を開始し、それから『ラ・シルフィード』の上演を始め、8月13日に突然、公演だけではなく、レッスンやリハーサルまでも中止した。その後インテルファックス通信が、マリインスキー・バレエ団で30名のダンサーが新型コロナウイルスに感染したと報じたという。こうしたニュースは、公演再開の期待を込めてロシアのバレエ団の動向を注視していたヨーロッパのバレエ団にとって、残念な結果でもあった。

英国

英国政府は本来ならば8月初頭から屋内での公演再開を許可するはずであったが、それを8月15日まで延期すると発表した。

8月中旬にはダンスを中心に上演するロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場が、従業員を解雇する予定であるという報道が入った。組織全体の26%にあたる約50名の従業員を解雇するという。新型コロナウイルスによる影響で、サドラーズ・ウェルズ劇場は収入が8割減り、解雇を避けようと様々な手段を講じたが、万策尽きた結果だという。

同時に英国では8月中旬に、2,500名が集まる屋外コンサートがニューカッスルで開催された。ソーシャルディスタンスを保ったコンサートはこれが英国初だという。

北米

バレエ・アリゾナは、秋シーズンはオンライン公演を中心とすると発表した。バレエ・アリゾナは本来ならばバレエ団創立35年プログラムを上演する予定だった。また『くるみ割り人形』公演も中止となることが発表された。

ワシントン・バレエでは事務局長が退任し、『くるみ割り人形』を含め、予定されていた公演がすべて中止となることが発表された。バレエ団にとっては非常に大きな経営面での打撃となることが予想される。

サンフランシスコ・バレエ団も『くるみ割り人形』開催を中止したとの報道があった。これは州によって大規模なイベント開催が禁止されているからに加えて、サンフランシスコ戦争記念オペラハウスも閉鎖されているからだという。

またバレエ興行主のダニリアン夫妻が、新型コロナウイルスによる公演中止で、経済的に大きな問題を抱えていることも報道された。ダニリアン夫妻はニューヨークのリ

ンカーンセンターでエイフマン・バレエの公演、またカルフォルニア州コスタメサのセガストローム芸術センターでミラノ・スカラ座バレエ団の公演を開催することを予定していたが、どちらも中止となった。またマリインスキー・バレエ団の招聘公演も企画していたという。そうした公演の航空券やホテルのデポジットは支払い済みで、一部の資金が戻ってきたのみだったという。招聘公演を企画しても、ソーシャルディスタンスを保たなければいけない中では、経費すらもカバーできないとの発言もあった。

またカナダ国立バレエ団も、観客とアーティストの安全を考え、年末の『くるみ割り人形』公演中止を決定したとの報道もあった。1955年以来初めてのことだということだ。2021年3月の冬シーズンと6月の夏シーズンは開催予定だという。

その他の地域

ニュージーランドではロイヤル・ニュージーランド・バレエがモダンバレエ作品で、国内ツアーを開始する予定である事が報じられた。ツアーは8月20日から始まる。ニュージーランド・バレエ団は、世界でも自分たちがほぼ唯一、2020年にツアーができるバレエ団ではないかと述べている。

2020年9月

概観：9月は欧米においてオペラハウスやバレエ団のシーズンの始まりということもあり、徐々にレッスンやリハーサルを開始する動きがあった。また客席においてソーシャルディスタンスを保ちながらではあるが、ガラ公演等を再開するというニュースもあった。オーストラリアや中国では本格的な公演再開の動きもあった。しかしながら活動を再開した劇場では、集団感染が起こったというニュースもあった。

欧州・ロシア

ロシア・モスクワのボリショイ劇場は9月にオペラ公演とバレエ公演の両方を、合唱や群舞も入れた形式で再開した。客席はソーシャルディスタンスを守り、劇場の観客収容人数の半分以下で公演を行った。しかしながらオペラ公演において、歌手の新型コロナウイルス感染が報告された。

フランス・パリのパリ・オペラ座もレッスンを再開したが、同時に数名のダンサーの新型コロナウイルスに感染したとの報もあった。

英国

英国では英国ロイヤル・バレエ団のダンサーらが屋外での公演に参加した。ロイヤル・バレエ団ダンサーのミーガン＝グレース・ヒンキスが企画し、英国・ドーセットで開催された本公演では、感染予防のために観客はソーシャルディスタンスを保ち、またダンサーらも週に数回、新型コロナウイルス検査を受けて公演準備を行った。

また英国ロイヤル・バレエ団は10月9日に、3月以来の公演を行うと発表した。100名以上のダンサーが舞台上がるカムバック公演であり、公演時間は2時間半ほどを予定している。

英国政府はソーシャルディスタンスなしでの劇場再開を視野に入れていると発表した。英国では8月中旬にソーシャルディスタンスつきの公演は再開されているが、特にクリスマス時期に、ソーシャルディスタンスなしで公演を再開することができるかどうかは、劇場の経営面で非常に重要な問題である。オリヴァー・ドウデン英国文化相は、劇場再開に向けて様々な科学的実験を行うことで、クリスマス時期までにソーシャルディスタンスなしの公演を再開したいという見方を示した。

ロンドンのウェストエンドでは、劇場閉鎖から8カ月ぶりとなる11月中旬に公演再開を予定する劇場も現れ始めた。

またロンドンを拠点とするコンテンポラリーダンスのカンパニーであるランベールは、デジタル上に新たなプラットフォームを構築し、新作発表等もそのプラットフォームで行うと発表した。そもそも新型コロナウイルス感染拡大以前から企画されていたが、公演中止等によって公開が早まった。このデジタルプラットフォームでは公演のライブストリーミングだけでなく、ダンスレッスンや舞台裏の特別映像なども見ることができる。

北米

ヒューストン・バレエ団はオンラインでファドレイジングのためのガラパーティーを開催し、9万ドルの寄付金を集めた。参加者はレストランに車で赴き、パーティーのディナーをピックアップして、自宅にてディナーを食べながら、オンラインでガラパーティーを楽しむという趣向である。

その他の地域

オーストラリア・パースを拠点とするウェスト・オーストラリアン・バレエ団は9月11日にヒズ・マジエステー劇場で公演を再開した。ザ・ウェスト・オーストラリアン紙は、本公演がオーストラリアにおける、著名なバレエ団による初めての公演再開だと述べている。

中国・北京を拠点とする中国国立バレエ団は、新型コロナウイルス感染拡大が始まってから、初めて公演を再開した。

2020年10月

概観：ヨーロッパや英国では10月上旬にバレエ公演が再開したが、中旬以降になるとバレエ団団員の新型コロナウイルス感染が判明し、公演を中止せざるを得なくなった事例も現れ始めた。英国では11月の劇場再開に対して前向きな取り組みが見られ、クリスマス時期に『くるみ割り人形』公演を開催する予定であると発表するバレエ団も現れた。同時に北米では、最大

規模のバレエ団のひとつであるニューヨーク・シティ・バレエ団が公演再開時期を2021年9月に決定し、2020年シーズンは公演を行わないことを発表した。

欧州・ロシア

イタリアでは10月上旬にミラノ・スカラ座でバレエのガラ公演が計4公演、開催された。客席ではソーシャルディスタンスが保たれ、2,000席の劇場で800名の観客が公演を鑑賞した。オーケストラはステージ上で演奏し、ダンサーはオーケストラピットの上に設けられた仮設スペースで踊った。一緒に踊ったダンサーは、ほとんどが実生活でもカップルで世帯を一にしている。しかし10月後半になると、イタリア政府からの指示で、ミラノ・スカラ座を含めたイタリア全土の劇場が閉鎖されることが決定した。新型コロナウイルスの感染が急速に拡大したためである。

オーストリア・ウィーンではオペラのシーズンが開幕したとの報道もあった。歌手は新型コロナウイルスの検査を受け、合唱の人数の減らし、フェイスカバーとマスクを着用し、リハーサルを行っている。オーストリアの防疫は比較的うまく行っており、8月にザルツブルク音楽祭も開催されたという。

スイス・チューリヒのチューリヒ・オペラ・ハウスでは、10月中旬に開催予定だったバレエ『眠れる森の美女』公演が中止された。バレエ団団員から新型コロナウイルスの検査で陽性が検出されたためだ。バレエ団全団員が10日間の自宅待機を行い、その後に公演を再開するという。

ドイツのバイエルン国立バレエ団は、ダンサーが新型コロナウイルスに感染したことにより、10月下旬に開催予定だった『白鳥の湖』公演を中止した。

英国

英国ロイヤル・バレエ団がクリスマス時期に『くるみ割り人形』を上演する予定であると発表があった。新型コロナウイルス感染予防のため、客席ではソーシャルディスタンスを保ち、また新たな演出で上演する予定だ。またバーミンガム・ロイヤル・バレエ団も通常公演を行うバーミンガム・ヒポドロームでなく、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで『くるみ割り人形』を上演する予定だ。

10月には英国ロイヤル・バレエ団のカムバック公演が、ロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスで開催された。ソーシャルディスタンスを保つため、通常2,000名以上の観客収容人数を400名で開催した。また劇場に入場する際には検温が行われ、観客にはマスク着用が義務付けられた。公演はガラ公演で、古典から現代の作品まで幅広く上演され、バレエ団全員がステージに上がった。

英国・バーミンガムを拠点とするバーミンガム・ロイヤル・バレエ団は英国政府より、コロナ禍で経営面の問題を抱えた芸術団体を守るための、緊急支援金を受け取った。ロンドンを拠点とするイングリッシュ・ナショナル・バレエ団は11月にサドラーズ・ウェルズ劇場で公演を再開し、また12月には『くるみ割り人形』公演を開催す

る予定だと発表を行った。『くるみ割り人形』は新型コロナウイルス感染予防のために、通常公演の演出に変更を加え、新たに『ナットクラッカー・ディライト』という作品とし、上演時間も75分として上演するという。

新型コロナウイルス感染拡大によって閉鎖されていたサドラーズ・ウェルズ劇場も11月に公演を再開する予定であると発表した。客席はソーシャルディスタンスを保つ予定である。またデジタルによる公演の配信も継続して行う。

北米

ボストン・バレエ団がレッスンを再開し、6か月ぶりに所属するダンサーがスタジオに戻った。ボストン・バレエ団は医療や防疫の専門家と協力して、空気清浄機を導入するなどして、ダンサーの安全確保のために様々な取り組みを行った。またダンサーがスタジオにいないでレッスンを受けられるよう、ライブストリーミングでスタジオと別の場所をつなぐことができるような設備を整えるなどした。

ニューヨーク・シティ・バレエ団は2021年9月に公演を再開する予定で、それまで公演を行うつもりはないと発表した。プリンシパルの引退公演も2021年シーズンに延期されることとなった。同じニューヨークのブロードウェイも、2021年5月まで劇場を閉鎖すると発表した。10月現在、ダンサーは一人ならばバレエ団スタジオでレッスンを行うことが可能だという。メトロポリタン・オペラはすでに2021年9月以降に公演再開をする予定であると発表している。

その他の地域

特になし

2020年11月

概観：ヨーロッパでは急速に新型コロナウイルスの新規感染者が増加し、その結果、再度の劇場閉鎖となった地域も多かった。予定されていた公演が急遽中止となったバレエ団の話題が相次いだ。

欧州・ロシア

フランスでは新型コロナウイルスの感染拡大を受け、10月30日深夜から1ヵ月間にわたり公共施設が閉鎖されることとなった。それに伴い、パリ・オペラ座も劇場を閉鎖し、またその期間に予定していた公演を中止とすることとした。

ミラノ・スカラ座では10月末に、オペラの合唱団員とオーケストラ団員の感染が報告された。また同じイタリアのナポリ・サンカルロ劇場でも、オーケストラ団員や事務局スタッフ、また合唱団員の感染が判明した。イタリア全土の劇場は10月末より11月24日まで、イタリア政府の要請で閉鎖している。

ドイツのベルリン国立バレエ団は8月から徐々に舞台を再開し、ガラ公演の上演など

を経て、10月には『ジゼル』を上演した。しかし11月にはドイツで新型コロナウイルスの感染が拡大したため、11月以降の公演は中止となった。

ロシアのポリショイ・バレエ劇場では10月末にスタッフの多数が新型コロナウイルスに感染したという報道があった。

英国

バーミンガム・ロイヤル・バレエ団ではソーシャルディスタンスを保つことのできる舞台衣装を導入したほか、ダンサーの接触回数を減らすために、グループごとにレッスンを行うなどしている。

イングリッシュ・ナショナル・バレエ団はデジタルプラットフォームを構築した。利用者はデジタルプラットフォーム上でバレエ公演の映像等を鑑賞することができるだけでなく、オンライン上でバレエを基本としたエクササイズクラスも受講することができる。

またイングリッシュ・ナショナル・バレエ団は、新型コロナウイルス感染がイングランドで急速に拡大したため、サドラーズ・ウェルズ劇場で予定していた公演を中止することを余儀なくされた。

北米

ボストン・バレエ団のダンサーらがスタジオに戻り、オンライン公演のために撮影を行った。こうした映像はクリスマス時期に配信される、オンライン公演の一部として上映される予定だ。ボストン・バレエ団はクリスマス時期に、観客つきの『くるみ割り人形』公演は行わないと発表している。

カナダ・トロントを本拠地とするカナダ国立バレエ団は2020年から2021年にかけてのシーズンに予定されていた公演を全て中止すると発表した。2021年6月には新制作『白鳥の湖』公演も予定していたが、それは2021年-2021年シーズンに上演される予定だ。

サンフランシスコ・バレエ団のデジタルシーズンが開幕した。様々な公演をオンラインで上演する予定だ。芸術監督のヘルギ・トマソンは、普段ならばお客様は劇場に行かないとサンフランシスコ・バレエ団の公演を観ることができないが、デジタルシーズンが始まることによって世界中でバレエ団の公演を楽しむことができる、とオンライン公演の長所にも言及した。

ワシントン・バレエ団は2020年-2021年シーズンの公演をすべてデジタルで行うと発表し、国際的なストーリーミングプラットフォームであるマーキーテレビと提携した。ワシントン・バレエ団とマーキーテレビは、この提携は臨時的な試みではなく、新型コロナウイルスが収束しても提携を継続する予定であるという姿勢を示した。ジュリー・ケント芸術監督は、実演芸術が生き延びるには、考えを発展させ続ける必要があると述べている。

その他

韓国のバレエ教室で、集団感染が報告された。

香港では香港バレエ団が10ヶ月ぶりに公演を再開した。香港文化中心劇場で開催された本公演では、全座席の75%しか販売を行わず、オーケストラピットと客席の間にはプラスチックの敷居が設置された。

2020年12月

概観：欧州や英国では感染の再拡大によって、劇場閉鎖を余儀なくされたバレエ団の話題が多かった。無観客公演を配信したバレエ団もあったが、公演の時期によっては、無観客公演すらも中止となったバレエ団もあった。また欧米のバレエ団の収入にとって重要なクリスマス時期の公演が中止となったことで、経営面での懸念も報じられた。

ロシア・欧州

フランスのパリ・オペラ座は12月に公演再開を予定していたが、それを延期した。延期された公演はバレエ公演『ラ・バヤデール』も含む。それと同時にパリ・オペラ座はデジタルプラットフォームを構築し、公演の配信を開始した。デジタルプラットフォーム上では無料のコンテンツなどが公開されているほか、12月13日の無観客『ラ・バヤデール』公演をライブ配信した。

ロシア・サンクトペテルブルクを本拠地とするマリインスキー・バレエ団では、数名のダンサーが新型コロナウイルス感染の疑いで自宅隔離を行っているという情報もあった。

また11月末にロシア国立モスクワ・クラシックバレエ団は台湾ツアーを行うために台湾に到着したが、必要な隔離期間を終えた後に検査を行ったところ4名の団員が陽性であり、再検査をしたところ別の団員からも陽性反応が出た。その結果、残りの団員も2度目の隔離期間を過ごす必要があり、台湾公演は中止となったという報もあった。

ボリショイ劇場の劇場関係者も、多くの人が自宅隔離を余儀なくされているという情報もあった。

英国

12月15日に新型コロナウイルス感染拡大によりロンドンの警戒レベルがティア3に引き上げられたため、英国ロイヤル・バレエ団は12月16日以降の『くるみ割り人形』公演を中止することとなった。22日には無観客の『くるみ割り人形』公演ライブストリーミングを行う予定だったが、ロンドンの警戒レベルがさらに引き上げられたことで、その公演も中止となった。代わりに『不思議の国のアリス』が放映された。また感染拡大と劇場閉鎖により、ロンドン・ウェストエンドの劇場も公演中止を余儀なくされた。秋から劇場が再開を始め、劇場関係者が仕事に戻り始めたところで劇場

閉鎖を余儀なくされたため、関係者からは強い反発があった。公演の準備へ資金を使い、その資金を取り戻す時間もなく、興行の途中で劇場閉鎖となったためだ。劇場関係者、特にフリーランサーは経済的に困窮している人々も多いという。

イングリッシュ・ナショナル・バレエ団は『ナットクラッカー・ディライト（くるみ割り人形）』を無料で配信した。公演は12月18日、19日にロンドン・コロシウム劇場で撮影され、12月24日より配信された。

北米

米国のバレエ団の多くはクリスマス時期の『くるみ割り人形』公演に収入の多くを依存しており、その公演が中止になったことで、経営面で大きな打撃を受けた。Dance Magazine 誌が行った調査によると『くるみ割り人形』公演収入は、米国バレエ団の年間総収入の48%程度を占めているという。米国の多くのバレエ団は『くるみ割り人形』上演中止で失われた収入を映像配信等で埋めようと試みているが、映像配信はチケット収入ほどの利益は生まない。基金を持つバレエ団は基金を頼り、それがないバレエ団の経営はさらに悲惨な状況である。

ニューヨーク・シティ・バレエ団も『くるみ割り人形』公演を中止し、経営面でひっ迫している。バレエ団団員は失業保険を受給している。バレエ団員らは新たな団体を設立し、オークションなどを通じてファンレイジングをする活動を始めた。

アメリカン・バレエ・シアターは2021年6月に予定していたバレエ団春シーズンを中止すると発表した。ニューヨーク・シティ・バレエ団を含め、多くの米国のバレエ団はすでに春シーズンの中止を発表している。アメリカン・バレエ・シアターの春シーズンは2021年6月開始と、他のバレエ団と比べて遅い開始時期であったため、バレエ団幹部は当初楽観的な見通しを立てていたが、新型コロナウイルス感染の再拡大を受けて中止を決定したという。また春シーズンは中止となったが、屋外の会場で公演を行うことを予定しているという。

その他の地域

カイロ国立オペラ・バレエ団は『くるみ割り人形』を、12月23日から29日までカイロ・オペラ・ハウスで上演した。カイロ・オペラ・ハウスでは毎年12月、『くるみ割り人形』を上演している。

2021年1月

概観：新型コロナウイルス蔓延当初はバレエ団公演をいかにデジタルストーリーミングで放映するかについての報道が多かったが、1月になるとデジタル分野の取り組みで、さらに一歩踏み込んだ報道もあった。例えばバレエ公演のデジタルストーリーミングにマルチビュー機能を加えることで、さらに鑑賞体験を充実したものにするのではないかと、といった内容だ。ロシアで

は秋から公演が継続的に開催されており、オーストラリアでも公演が再開されている。

欧州・ロシア

ポーランド国立バレエ団においては、賃金や建物の維持費は国から出ており、収入を大きくチケット収入に依存していないため、経営面へのそこまで大きな影響はなかったという。

ロシアのボリショイ・バレエ団は秋に公演を再開し、1月の時点でバレエ公演を継続している。ABCNEWSによれば、劇場側は正確な数を公表していないものの、11月にボリショイ劇場ウリン総裁がプーチン大統領に面会した際には、劇場関係者3,000名のうち、124名が新型コロナウイルス感染したと述べた。ボリショイ・バレエ団マハール・ワジーエフ芸術監督は、バレエ団団員数が多いので代役を立てることが可能であり、そのため公演が継続可能なのだと述べている。

英国

スコットランド・グラスゴーを拠点とするスコティッシュ・バレエ団は、バレエ団の持つ健康プログラム強化を図った。新型コロナウイルスとの戦いにおいて最前線にいるNHS職員が、その肉体的、精神的苦痛を和らげることのできるようなプログラムを提供するという。2020年からそうした取組を行ってきたが、2021年は継続してプログラムを制作し、提供を続けるという。

英国からはまた、マルチビューという、視聴者が視点を選ぶことのできるストリーミング機能に関しての記事があった。新型コロナウイルスが蔓延し、劇場が閉鎖を余儀なくされてから、多くのバレエ団は公演のストリーミングを開始した。しかしその状況が長く続いたことでバレエファンにはストリーミング疲れのようなものが起きているのではないかと。マルチビューでは複数台あるカメラから、視聴者が自分の見たい映像を選ぶことができる。カメラを選択するなど、視聴者が参加できる形態のマルチビューストリーミングこそが、舞台芸術の映像配信に新たな可能性を提示しているのではないかとという内容である。

北米

1月中旬にサンフランシスコ・バレエ団はヴァーチャルでファンドレイジングのガラ公演を行った。豪華なディナーやワインは参加者の自宅に配達され、参加者はそれを自宅で楽しみながら、録画された公演を鑑賞することとなった。また参加者はZOOM上で社交を楽しんだ。

その他の地域

オーストラリア・パースを本拠地とするウェスト・オーストラリアン・バレエ団は2020年2月の時点で、経営面でも芸術面でも好調だった。ロックダウンが始まったが

6月には観客数を絞った公演を再開し乗り切ったという。賃金には毎月50万オーストラリア・ドルの資金が必要だが、2019年はチケットが売れたので、バレエ団に資金があり、その資金で補填しているという。ウエスト・オーストラリアン・バレエ団は世界でも早い段階で公演を再開したため、世界中のバレエ団芸術監督が参加するグループチャットで、様々な芸術監督らから公演再開についてアドバイスを求められているという。

2021年2月

概観：ワクチン接種が始まったこと等から、米国ニューヨークと英国ロンドンでは、劇場再開に向けての動きが本格化し始めた。英国ロンドンでは5月中旬に人数制限付きの劇場再開、6月下旬には人数制限撤廃の可能性が示唆され、ニューヨークでも州知事が劇場再開の可能性について言及した。またバレエ界のデジタル利用に関しては、スマホのスクリーンで見ることを前提としたバレエ動画が制作される、SNSにおいてもインスタグラムだけでなくTik Tokが活用され始めるなど、様々な動きが出てきている。

欧州・ロシア

パリ・オペラ座は無観客の観客ファンドレイジングガラ公演を開催し、伝統のデフィレを行った。ダンサーはサージカルマスクを着用して舞台上がった。招待客は自宅に送られたシャンパンやつまみを楽しみながら、公演のストリーミングを楽しんだ。本公演はオペラ座のオンラインチャンネルで配信された。

また続報では、パリ・オペラ座は新型コロナウイルスとその変異種による影響で、2月に予定されていたオペラや室内楽コンサートを中止、また無観客公演のデジタルストリーミング公開とすると発表した。

EU圏内の文化産業は、航空産業に次いで、新型コロナウイルスによって打撃を受けたという報告もあった。2019年と比較すると、実演芸術は2020年、9割の収入減となったという。

英国

ボリス・ジョンソン英国首相は5月17日からの、人数制限付きの劇場再開の可能性について示唆した。また6月21日はさらなる緩和を予定しており、人数制限が撤廃されるのではないかとみられている。

北米

ヒューストン・バレエ団は4月に『くるみ割り人形』をテーマとしたマーケットを開催すると発表した。約160の出店者が集い、インテリアやアパレル、食べ物などを販売する。売上の10%はバレエ団の基金やバレエ学校の奨学金などに充当される。

ニューヨークでは2020年3月より劇場閉鎖が続いているが、クオモ州知事はブロー

ドウェイの劇場や娯楽施設を、制限付きで再開する可能性について示唆した。コロナウイルス検査をさらに広く実施することで、安全性を高めようという試みだ。ブロードウェイ関係者ら所属するブロードウェイリーグは、5月末までは劇場が再開の見込みがないだろうと判断し、5月末までのチケットを購入した顧客にはチケットの返金や交換するように求めていた。しかしそれ以前に劇場が再開する可能性があるかもしれない。

またニューヨーク・シティ・バレエ団のダンサーらが、配信映像を撮影するために、デイヴィッド・H・コーク劇場へ戻った。

またバレエ界のSNS利用について、ニューヨーク・タイムズ紙の記事では、新型コロナウイルス蔓延によって自宅にいることの多くなった若いダンサーやバレエ学習者らがTik Tokを使って様々なことを共有しているという報道があった。Instagramではバレエのテクニックを披露する動画が多いが、Tik Tokではバレエについてどう感じるのかなど、考えに関する動画が人気だという。アメリカン・バレエ・シアターもTik Tokにアカウントを開設した。

米国・フロリダのサラソタ・バレエ団は新型コロナウイルスが蔓延してから、観客の前で公演を行っていなかった。しかし3月に始めて、観客を前にして野外公演を開催する。

その他の地域

オーストラリアン・バレエ団と携帯電話会社テルストラは、ソーシャルメディア・キャンペーンのために、スマホの画面で見るときの短いバレエ映像を創作した。スマホのアスペクトに合わせて縦長のセットを制作し、ダンスフロアも特注した。6つある動画ではそれぞれテルストラ・ダンス・アワード候補者が踊っており、視聴者はお気に入りのダンサーに1票入れることができる。

3-2 バレエ団運営スタッフ向け ファンドレイジングセミナー

● 背景・概要

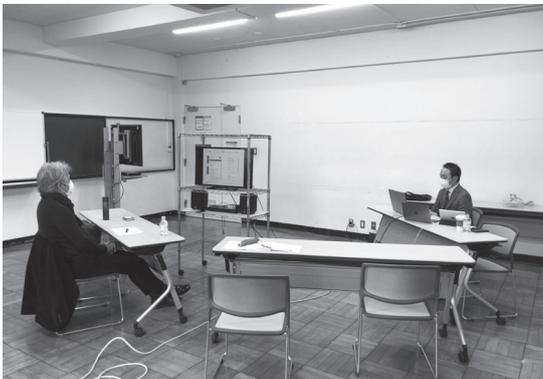
令和2年度は、新型コロナウイルスの影響により、各バレエ団は公演活動の自粛や工夫を余儀なくされ、これまでにない困難な状況に直面した。

なんとか生き残り、舞台芸術の灯を絶やさず、引き続きお客さまにバレエ芸術をお届けしていこうと、コロナ禍に伴い寄附のお願いを行ったバレエ団も複数ある。各バレエ団は舞台芸術を愛する多くのお客さまからのご支援をいただき、感染対策を行った上での公演活動も少しずつ再開しているが、お客さまが劇場に足を運びにくい状況が続く中、公演活動を続けようという使命感と、公演を続けるほどに赤字がかさんでゆくという現実のはざままで苦しんでいる。

以前のような公演活動を行える状態に戻るには、まだまだ時間がかかるだろうと考えられ、バレエ団は今後もさらなるご支援をお客さまにお願いしていかなければならない現状がある。そこで、各バレエ団および日本バレエ団連盟が、今後のファンドレイジング方策を検討するために参考となるセミナーを、日本バレエ団連盟の会員団体の運営スタッフを対象として開催した。

今回セミナーの講師としてお招きしたのは、このコロナ禍で舞台芸術に関わる様々な分野のアーティスト・スタッフ・クリエイターたちが、これから先活動するための資金を失っていることを受けて、舞台芸術を救うために「舞台芸術を未来に繋ぐ基金 (Mirai Performing Arts Fund)」を立ち上げた発起人のうちのお一人の杉本宏氏である。

この基金には、本年度、マスタークラス・公開レッスンの講師として招へいした加治屋百合子氏がコロナ禍を受けて立ち上げたオンラインプロジェクト〈Hearts for Artists〉(ハート・フォー・アーティスト)が、そのオンライン・バレエレッスン、オンライン・トークイベントの受講料・参加料をすべて寄附していた。そのような経緯もあり、日本バレエ界における今後のファンドレイジングについて参考となる情報を、これまでの基金運営のご経験を踏まえた視点からお話しいただけることから、講師を依頼した。



● 実施概要

- 題名：今後のファンディング活動の参考として～120日間の基金運営の実際～
- 日時：2021年2月25日（木）15：00～17：00
- 場所：芸能花伝舎 A棟1階 A3会議室（東京都新宿区西新宿6丁目12番30号）
およびオンライン（Zoom）
- 講師：杉本事務所代表 杉本宏氏
（舞台芸術を未来に繋ぐ基金 発起人／一般社団法人未来の会議 代表理事）

<講師略歴>

2012年より経営コンサルティング業を営み、主に企業の東南アジア進出・展開の支援及びM&Aの助言を主業としている。それとは別に、2011年に株式会社ショウビズ（東京都世田谷区代田）を共同設立し、年間2～3本のミュージカル、演劇などの舞台公演を製作し、4名の舞台俳優をマネジメントしている。2019年10月からは、杉本事務所において舞台公演製作における初期資金の投資を行い、2020年4月現在、4件の投資を実行している。

<主なセミナー内容>

- 「舞台芸術を未来につなぐ基金（未来基金）」でのご経験について
（問題意識（取り巻く環境）、発起人の現状分析、基金の前提、実施事項の整理、実施スキーム、寄付額積み上げのための工夫、助成の推移、助成者からの声と気づき 等）
- 次のステップへ（イベントの実施、今後のファンレイズ）
- 未来基金の運営経験を踏まえたバレエ関係者へのフィードバック
- 未来基金の意図を引き継ぐ後継団体として設立された「一般社団法人未来の会議」における取り組みのご紹介
- 意見交換／質疑

<参加団体>（五十音順）

日本バレエ団連盟会員団体である下記の4団体より運営スタッフが参加した。

- スターダンサーズ・バレエ団（オンライン）
- 東京バレエ団
- 東京シティ・バレエ団（オンライン）
- 牧阿佐美バレエ団（オンライン）

3-3 ダンサーのコンディショニングセミナー ～コロナ禍における怪我の事例を踏まえて～

● 背景・概要

令和2年度は新型コロナウイルスの感染防止対策のため、ダンサーにとっては例年とは異なる環境でのレッスンや公演が続いた。自粛期間を経て舞台上で踊る感覚が戻りきっていなかったり、感染対策のために稽古場や舞台上で体を思いきり動かせる機会も減ったことが影響してか、バレエ団の公演やレッスンにおいて、ジャンプ等に伴う怪我の事例や、身体の不調を感じるダンサーが散見された。

そこで、コロナ禍に伴う怪我の事例を踏まえて、ダンサーの身体のメカニズムをひもときながら、気を付けたいポイントや、ダンサー自身で行うことができるコンディショニングの方法を紹介するセミナーを開催した。このような知見を共有することは、ダンサーにとって怪我の防止だけでなく、パフォーマンスの向上にも直結する。

バレエダンサーは、ある程度キャリアを積み、身体に不調が出たり、身体を思うように動かすための自己メンテナンスの重要性を実感するようになってから、このような情報にアンテナを張り始める傾向がある。今回のセミナーでは、日頃からトレーニングやメンテナンスに関心を持っているだけでなく、若手の新進ダンサーにもセミナーを受講していただいた。

日本の多くのバレエ団は、ダンサーたちのために、できることならば海外の代表的なバレエ団のように専属のフィジオ（理学療法士）を雇用したり、身体のメンテナンスのための部屋や器具を備えたいという思いを持っているが、それを行うだけの余裕を持っていない。このような状況の中、ダンサーたち自身にコンディショニングの知識を持っていただくことは重要な対策のひとつである。

今年度、各バレエ団は、ダンサーたちにとってベストとはいえない環境下で、このコロナ禍におけるあらゆるリスクを想定しながら、工夫してレッスンやリハーサル・公演を行ってきた。ダンサーたちの安全を十分に確保しながら、芸術を追求することには難しさがあるが、本セミナーはその一助となった。

● 実施概要

- ・テーマ：ダンサーのコンディショニングセミナー ～コロナ禍の怪我の事例を踏まえて～
- ・日時：2021年3月5日（金）15：00～17：00
- ・対象：日本バレエ団連盟の会員団体に所属するバレエダンサー、バレエ指導者
- ・実施方法：Zoomによるオンラインセミナー
- ・企画協力：NPO法人芸術家のくすり箱
- ・講師：杉本亮子氏

<講師略歴> 杉本亮子

ボディコンディショナー LMA/BF、マットピラティスインストラクター
 お茶の水女子大学大学院修士課程 人文科学研究 舞踊教育学専攻
 (動作学) 修了。2002-04年、文化庁在外研修員としてNew Yorkにて
 ダンスとボディ・コンディショニングについて研修をうける。
 Laban/Bartenieff Institute of Movement StudyにてCMA (Certified
 Movement Analyst; 2004)、Physical Mind Instituteにてピラティ
 ス・マットエクササイズの指導資格を取得。現在は昭和音楽大学、
 日本バレエ協会サマースクール、アーキタンツ等にて、ボディ・コン
 ディショニング指導や解剖学、運動生理学の講義をおこなっている。



<参加者>

日本バレエ団連盟会員団体である下記の4団体より、計12名が参加した。

- 井上バレエ団：3名
- スターダンサーズ・バレエ団：1名
- 東京バレエ団：1名
- 東京シティ・バレエ団：7名

<セミナー内容>

*新型コロナウイルス感染拡大時における長期自粛明けの活動再開における障害発生について
 運動への耐性が低下している
 →急な高負荷のダンス活動の再開が一因とな障害発生の可能性が高くなる

*段階的なダンス活動再開の提案

*不活動による身体への影響の個人差を、継続的に確認することについて

- ①姿勢観察：安静姿勢、動的姿勢の観察と「歪み戻し」と「筋肉のギュッと感への対応」
- ②フィジカルチェック（下肢）：筋出力の確認

*コンディショニングの種類と具体的な方法

- ①柔軟性維持：静的・動的ストレッチの実行
- ②自重負荷の筋出力を上げるような筋力トレーニング：各身体部位の動きの確認
- ③人を避けながらの屋外での有酸素トレーニング

<セミナーの様子>

